

日本庭園学会ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

NO. 69
平成 24 年

予告 平成 24 年度全国大会

発行 日本庭園学会 (会長 藤井英二郎)
〒 150-0041 東京都渋谷区神南 1-20-1
(有) 造園会館気付
TEL(03)-3462-2850 FAX 03-3464-8465
<http://www.soc.nii.ac.jp/asjg/>



予告 平成24年度全国大会・研究発表会

平成24年6月9・10日 東京都

企画委員会全国大会運営担当（委員長 鈴木誠・副委員長 栗野）は、平成24年度全国大会の開催スケジュール及びシンポジウムのテーマを決定した。

開催日程は、平成24年6月9日、10日の2日間。1日目は、学会賞授賞式並びに総会・研究発表が開催され、終了後には情報交換会が予定されている。2日目は午前中に現地検討会、午後に公開シンポジウムが行われる。シンポジウムのテーマは「椿山荘の文化と庭園」である。

これまで日本庭園学会では、「近代の日本庭園」（平成17年度）、「庭園の国際交流」（平成18年度）、「旧古河庭園と近代の庭園」（平成20年度）、「戸定邸と千葉大学園芸学部松戸キャンパス」（平成21年度）などの大会企画テーマにおいて、継続的に近代庭園の検討を積み重ねてきた。本大会では、これまでの検討の延長線上に位置づけるものとして、近代庭園の代表例のひとつで

ある椿山荘庭園を取り上げる。椿山荘庭園は、近代庭園において自然主義の観点から作庭をおこなった山縣有朋の目白本邸の庭園として明治期に誕生し、大正期には近代数寄者のひとりである藤田平太郎に引き継がれ、流れ、池などの地割構成や、さまざまな石造美術品を庭園内にとどめている。

本シンポジウムでは、椿山荘庭園の構想、意匠、特徴について検討し、近代庭園史における意味を探るものである。

会場は、1日目が東京農業大学世田谷キャンパス、2日目が椿山荘庭園他が予定されている。詳細については次号の本紙（No.68）で案内する。

大会概要

会場：総会・研究発表会

東京農業大学世田谷キャンパス
（東京都世田谷区桜丘1-1-1）

現地検討会

椿山荘庭園（予定）

日時：平成24年6月9日（土）、10日（日）

第1日（9日）

9:30～ 研究発表会

12:00～13:00 昼食

13:00～14:00 総会

14:00～16:00 研究発表会

17:00～19:00 情報交換会

第2日（10日）

午前 現地検討会：椿山荘庭園

（場合によっては、旧細川邸も含めて見学）

午後 公開シンポジウム「椿山荘の文化と庭園」

（フォーシーズンズホテル椿山荘国際会議シアター）

参加費：未定

研究発表会 発表者の募集

平成24年度の研究発表会で発表を希望する方は、下記の要領にしたがうこと。

発表時間は、ひとりあたり30分とし、発表25分、質疑応答5分を予定しています(変更する場合もある)。また、発表にはPCプロジェクターの使用が可能である。

◆発表申込み期限：平成23年4月27日(金)

◆申込み方法

発表者氏名・所属・題名・連絡先を明記し、発表概要(200字程度)を添付のうえ下記の「発表申込先」までお送りください。原則的にはEメールとするが、郵送もしくはFAXでもかまわない。

◆発表要旨提出期限：平成23年5月11日(金)(本文版下原稿の郵送期限)
(Eメールでの送付の場合は、当日17:00までとする)

◆執筆要領

全発表者分を研究発表要旨集として印刷し、当日参加者に配布します。原稿はそのまま要旨集の版下とする。そのため、ワープロを使用しての作成すること。分量は、A4判で2ページもしくは4ページ、6ページとする(奇数ページでの原稿は、受け付けないので注意すること)。体裁は別紙の様式を確認すること。なお、本様式のデータを希望する方は、下記までEメールにてお問い合わせください。

◆発表の申込み先・発表要旨の提出先

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科

全国大会運営委員 栗野 隆

電話 03-5477-2428

FAX 03-5477-2625

Eメール t3awano@nodai.ac.jp

報告 平成23年度 関西大会

平成23年10月22、23日

平成23年度日本庭園学会関西大会が10月22、23日に開催された。1日目は名勝清風荘庭園にて現地見学会、2日目は文化財庭園保存管理に関するシンポジウム、研究報告が行われた。

清風荘においては普段非公開の建物や庭園の見学をさせていただいた他、保存修理工事に関わられた先生や、設計者、施工者など様々な立場の方々から庭園整備についての解説があった。その中で名勝清風荘庭園の植栽修理についてその基本方針、計画の内容などの説明があり、園内に主な視座を複数設定し、それをもとに景観設定がなされた旨が述べられた。

実際に建物の中を見学させていただいて、庭園の中からは感じることでできない庭園景観の役割があ



り、庭園内の視座はもちろん、建物における視座の設定の重要性を再認識することができた。また清風荘では如意ヶ岳を敷地内から望めるよう景観が整えられていたが、樹木の生長により見るができなくなっていた。その景観を取り戻すために周辺の高層化した建物の高さを算定し、何度も樹木伐採後の想定を重ねた上で修理を行っていたことが大変興深かった。

また築山の修理に関しては、修理前の箇所と修理後の箇所を比較して見るすることができた。現場では版築工法を選定した理由や、実際どういった道具を使用したのかなど、多くの質問がなされ、活発な議論の場となった。

各所で行われている文化財庭園修理現場に関わる多くの人が参加し、自由に意見を取り交わせる場としてこれからは会が発展することを期待するとともに充実した会に参加させていただいた事を大変嬉しく思います。

木下紘子（京都造形芸術大学大学院）

写真撮影：中川郷子（環境事業計画研究所）



学会賞授賞式の様子（尼崎博正氏）



学会賞授賞式記念講演の様子

報告 平成 23 年度 第 3 回見学会

平成 23 年 10 月 30 日

平成 22 年 10 月 30 日（日）、名勝多賀大社奥書院庭園（滋賀県犬上郡多賀町多賀）と名勝玄宮楽々園（彦根市）の見学会が開催されました。当日はあいにくの小雨でしたが、滋賀県造園組合の方々も参加され、充実した見学会となりました。

多賀大社奥書院庭園では昭和 30 年代に修理事業が行われていますが、その後約 50 年が経過する中で護岸石の一部が埋没、あるいは傾倒してしまったため、近年これらの復旧・整備が行われました。見学会では、修理に先立つ発掘調査、並びに保存整備設計を担当された（財）滋賀県文化財保護協会の重田勉に庭園の保存整備事業の概要をご説明いただきました。

多賀大社では平成の大造営の竣工を機に、平成 19 年度から 4 年計画で奥書院庭園の保存修理が行われまし

た。神社における庭園としては、たとえば上賀茂神社にみられるように「斎庭」「沙庭」などと呼ばれ、神が降臨する依代や神域として清められた白砂敷きのひろばがよく知られています。しかし、多賀大社奥書院庭園はこのような庭園とは趣を異にしています。築山には枯滝石組や蓬莱山をかたどった石組があり、清冽な小川から水を引いて作られた池には鶴・亀島が設けられ、これらを幽邃な森が包み込んでいます。「蓬莱山」「鶴島」「亀島」という名称から推察されるように、奥書院庭園には仏教思想の影響が顕著です。神社にこのような庭園が営まれた背景には、平安時代末期以降に神仏習合が盛んになったことが挙げられるでしょう。多賀大社では、室町時代中期の明応 3 年（1494）に不動院が建立されています。奥書院庭園は、はじめこの不動院の庭園として作庭されたものと考えられているのです。史料によりますと、天正 17 年（1589）に豊臣秀吉が母の病氣平癒祈願を不動院に行い米一万石を寄進しています。この寄進によって庭園が築造されたとする説があるようですが、作庭に関しては確実な記録がないようです。

奥書院庭園は昭和10年、史蹟名勝天然紀念物保存法により名勝に指定されています。作庭年代は不詳とされていますが、昭和11年に実測図の作成など詳細な現地観察を行った重森三玲は桃山時代の作風を伝えるものである、としています（『日本庭園史図鑑』第7巻）。奥書院から庭園を眺めると築山の背後に太田川が流れており、池は築山の手前に限られているように感じられます。しかし太田川の対岸（北岸）には、巨石を用いた石組がみられるのです。このことから重森氏は、かつて庭園の池は対岸にまで広がっていたが、洪水によって石組が埋まり、中島も岬に改修されて現在の姿となったものと推定されたのです。

平成8年ごろから奥書院庭園の護岸石組に緩みが見られるようになったことが、今回の庭園修理の発端のようです。今回の修理にあたっては、まず現況の実測図を作成し、過去2回作成された実測図（昭和11年・昭和32年）との比較を行ないつつ、護岸の緩みが見られた場所を中心に発掘調査が実施されました。その結果、（1）太田川北岸には埋没している石組があること、（2）池の北西部の護岸石組が背面の浸食によって崩れていること、（3）地表面に土砂が堆積し、蓬萊石や枯滝石組付近の石敷きの意匠が埋没していること、などが明らかとなりました。

太田川北岸の石組は、昭和32年ごろの修理工事によって当時埋没していた石組がいったん発掘されましたが、その後、再び埋没してそこに樹木が生い茂るようになったようです。今回の発掘調査では、さらに当時未検出の石組が存在していたことも判明したことから、可能な限りすべての石組が露出されました。

同様に池の北西部の護岸石組についても発掘調査が行われたところ、背後に別の護岸石が並んでいることが明らかとなりました。つまり、ある時期に庭園は改修されていたのです。庭園は、大地の上に、石や水や植物といった自然の素材で構築される空間です。時代を経ることによって庭園には風格も醸し出されますが、長年の風雨によって石組が緩むことも、繁茂する植物に覆い隠されてしまうこともあります。地震や火災によって、あるいは改造によって、庭園は作庭当初の姿から変わってゆきます。奥書院庭園も、かつて重森氏が指摘したように、こうした変化をとげつつ、現在に至っていることが今回の修理によって明らかとなったわけです。



現地で説明する重田氏

庭園の修理においては作庭当初の姿への復元を行なう事例も少なくないといえます。今回の修理にあたっては、これを機会に徹底した発掘調査を行ない、室町時代の姿への復元を行なってはどうか、という意見もあったようです。しかしそのためには長期間に及ぶ調査が必要となり、河川の改修や大規模な掘削・盛土の工事を伴うことが予想されるため、今回はまず昭和32年の庭園景観を目標として修理を行なうこととされ、発掘調査で検出された護岸石組については保存しておき、将来の復元修理に備えることとされました。特に埋没していた蓬萊石・枯滝石組付近の石敷き意匠は、昭和32年の庭園実測図と一致するものであることから、今回復元修理が行なわれています。

奥書院庭園は誰が、いつ、どのような目的で作庭したのか。作庭時はどのような姿であったのか。まだまだ多くの謎がひそんでいるようです。今回の修理事業を契機としてさらなる調査が行われることを期待したいと思います。非公開の庭園を快く見学させて下さった多賀大社様、ご案内いただいた重田さんに厚く御礼申し上げます。午後からは、名勝玄宮楽々園を訪れました。彦根藩主下屋敷であった槻御殿（楽々園）の建物は解体修理事業が進行中ですが、あわせて玄宮園庭園整備に向けた護岸発掘調査も実施されています。調査成果の概要と今後の整備計画について、彦根市教育委員会の担当者からお話をうかがうことができました。この内容については、その後さらに発掘調査が進められていますので、次の機会にご紹介したいと思います。（編集部）

関西研究会 考庭部会

文献研究の試み

これまで、関西研究会の考庭学部門では、埋蔵文化財の発掘調査の成果に依拠して、縄文期から奈良期までの〈庭〉の成立過程の研究を行ってきた。

今後は、分野を問わず「庭園」に何らかの関心がある者が集まり、学際的な共同研究を行うことを計画している。特に「文献」をキーワードとして、文献に関心のある庭園関係者・庭園に関心のある文献研究者といった枠を設けるが、時代はあえて限らないことにする。

庭園研究では文献に対しての専門知識・技術に欠け、正確に文献を取り扱えているとはいえない。また、庭園に関心のある文献研究者は、庭園の専門知識を有しておらず、文献研究者の庭園論と現実の庭園との間にはずれが生じているように思う。

庭園研究者と文献研究者が互いに討論することにより、より学際的な庭園研究へと発展することを期待したい。

上記の企画に感心がある方は、関西支部の今江(mukq95755@hera.eonet.ne.jp)までご連絡下さい。参加者は関西に限定しません。

会費納入のお願い

平成24年度の会費納入のお願いを全会員に送付しております。納入額をご確認のうえ、納入のほどよろしくお願い申し上げます。また、過年度滞納の方は併せて納入頂きますようお願いいたします。

表紙の写真

【多賀大社の庭園】

■編集後記

▼京都ではようやく梅の花も開き始めました。遅くなりましたが、平成23年度全国大会のご案内をお届けいたします

▼東日本を襲った未曾有の大震災から1年が過ぎましたが、今なお多くの方々が困難な状況にあります。この間、日本庭園学会のメンバーもそれぞれの立場から救援、復興にとりくんでこられたことと存じます

▼昨年度の全国大会で中止となったシンポジウム「椿山荘の文化と庭園」が本年度全国大会で行われる運びとなりました。多くの会員諸氏のご参加をお待ちいたしております。また、研究発表では、震災復興に関する活動報告についても積極的に登録をお願いいたします

▼学会誌への研究論文の投稿を随時受け付けています。研究大会での発表要旨は学会誌に転載されませんので、研究大会での討議を踏まえて、必要に応じて加筆修正のうえご投稿願います

▼会員名簿が更新されました。掲載内容の修正・変更等は、学会本部事務局 総務委員会までお知らせ願います。(T.N)

■学会ニュースへの投稿や、本誌「学会ニュース」やホームページ作成に興味があるという方は、下記宛に郵送またはFAXにてご連絡頂けますよう、よろしくお願い致します。

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
京都造形芸術大学日本庭園研究センター 気付
日本庭園学会 広報委員会「学会ニュース」係

FAX(075)791-9342

編集長／仲 隆裕 編集・写真・構成／今江 秀史

協 力／木下 紘子・中川 郷子

日本庭園学会広報委員会

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園研究センター 気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342